

普通の主婦だけど助産婦

前・昭和大学藤が丘病院産婦人科勤務

隠田陽子

結婚して1年。朝、夫を会社に送り出し、朝食の片付けをする。ちょっと掃除をしたら疲れて朝寝。起きたら昼ドラを見ながら昼食。あとは全部自由時間。本を読んだり、ピアノを弾いたり。マンションの下階の奥様とお茶を飲みながらおしゃべりするのも楽しい。夕方になったら、愛しのダーリンのためにウキウキと鼻歌を歌いながら、食事を作る。我ながら、なんと優雅で幸せな主婦なのだと思う。そう、この生活は、あの頃の私がずっとあこがれていた生活なのだ。

あの頃の私

あの頃の私は、とにかく仕事を辞めてゆっくりとしたかった。何よりも深夜勤が心身ともに辛かった。私が入職したとき、助産婦は私1人だった。とにかくスタッフは私が早く独り立ちできるように、分娩介助をどんどんやらせてくれた。お陰で私は、1年で100数例の分娩介助ができ、それなりに会陰保護の技術は向上したと思う。産婦人科にいた3年間で、約300例の分娩介助をした。しかし私は、次第に疲れてきた。深夜勤は夜の10時半から明朝8時半までと長い。時には分娩介助を3件やり、陣痛室に2~3人の産婦を抱え、朝の検温に回る。申し送りの準備もしなくてはいけないし、褥婦さんや妊婦さんの話もろくに聞かず、バタバタと走り通し。児心音が落ちて緊急帝王切開にでもなったら、最低限のことだけをして、残りは申し送り。疲れきったボーッとした頭でした仕事だから、ミスもあり、先輩に注意されて落ち込む。そんな日々の繰り返しだったよう

に思う。産婦さんが痛みのために顔をゆがめていても、忙しさのあまり腰をさすれないこともあった。また、自分が疲れきっていて、「腰をさすって欲しいのは私のほうよ」なんて思うってしまうこともあった。

助産婦学校で習った、自然出産・良いお産・待つお産、そんな言葉はどこへ行ってしまったのか。理想と現実のギャップを感じながら、日々の仕事に押し流されていた。

人手不足や私の仕事の不手際さ。勉強不足も自分自身を疲れさせた原因だったと思う。スタッフ同士で食事をする、多かれ少なかれ私と似たような「疲れ」を訴えていた。これは、病院で働く助産婦全体が抱えている問題だったのかもしれない。とにかく私は助産婦を3年やって、内科に1年間勤務した後、めでたく結婚退職し、疲れたふらふら時代にサヨナラした。

普通の主婦感覚

同年代の普通の主婦と話をするようになって、私の中の“普通”の感覚が蘇ってきた。「あれ、なんかこういうキャピキャピした感じって久しぶり。なんか懐かしい」と思った。看護学校からずっと看護に携わってきて、「自分は看護の専門家で、普通の人とは違うのよ」みたいな感覚を持っていたのかもしれない。確かにプロなのだから、プロ意識を持つことは大切だ。しかし、私の場合、プロ意識をはきちがえていたように思う。

高学歴の少産時代で、みんなお産の質を問うとされている。しかし、私の住んでいるマンショ



ンでは、Nクリニックと印刷されたバスタオルが
あちこちの窓に干してあった。Nクリニックは、
正常経過の場合であれば、希望により夫の立ち会
い分娩ができる。しかし、全例会陰切開だし、促
進剤の使用にも積極的な病院だ。多くの人は、
「近いし、みんな行ってるから。〇〇さんもそこ
で産んで良かったって言ってたから」などの理由
でNクリニックを選ぶ。主婦ネットワークの口
コミの威力はすごい。でも、多くの普通の主婦は、
自分にとっての良いお産ってどういうものか深く
考えていない。深く考えることが重要だってこと
も知らない。私は仕事を辞めて、本当にのほほん
とした毎日を送っているけど、やっぱり普通の主
婦とは違うことを知っている。この人たちに「私
が知っていることを話してあげたい」と思った。
「一口にお産といっても、その質は様々でちゃん
と選択しないと不本意なお産をしてしまうかもし
れない、ということを話さなくては」と思った。

これからの私

私は今、普通の主婦的感觉を忘れずに助産婦と
して仕事をしたいと考えている。普通の主婦の中
に入ってみると、いろいろな人からいろいろな相
談を受ける。「妊娠したいので基礎体温をつけて
いる。子宮ガン検診のときに、たまたま体温表を
医師に見せたら、『あなたは高温相に入るまでに
時間がかかるから、妊娠しにくいね』と言われた
けど、本当に妊娠しにくいのか？」とか、「お腹が痛
いので病院に行ったら、子宮後屈って言われた。
それって病気？」とか、医師に言われたことを理

解できなかったときの相談も多い。また、つい先
日出産した看護婦の友人からは、こんな相談を受
けた。「頭が変になったみたい。一生懸命やって
るけど疲れてしまって。これってマタニティーブ
ルーなのかな。仕方なく睡眠薬を飲んだりするけ
ど、睡眠薬を飲んだ後はどれくらい母乳をやめた
ほうがいいのか？」と。しかし彼女の相談事はこれ
だけではなく、その後「夫に『お前は母親失格だ。
睡眠薬なんか飲んで子供を殺す気か』って言われ
た。本当に自分が子供に変なことをしてしまうよ
うな気がして、触れなくなっちゃったの」。私は
自分の知っている限りを尽くして答えるのだが、
みんな一様に「話したらすっきりした」とか「安心
した」と言ってくれる。病院に電話をかけるほど
ではないが、専門家に「大丈夫」と言ってもらいた
い気持ちだろう。助産婦には当たり前のことでも、
普通の主婦には特別なことがたくさんある。普通
の主婦も知りたがっている。私は、そんな人
たちの間で相談相手になればいいと考えてい
る。私自身まだまだ勉強不足で、今後どういう形
でこの仕事に携わっていくかわからないが、普通
の主婦の中で、自分の知識はやはり特別なものと
わかった。普通の主婦は、身近な専門家としての
助産婦を求めていることもわかった。

これからも免許を持っている以上それを活用し
て、普通の主婦のために、延いては世の中のため
に役立てたいと思う。それはきっと、私自身の自
己実現のためにも大切なことだと思うから……。

次は、助産婦学校時代の友人、熊澤万里子さん
にバトンタッチします。